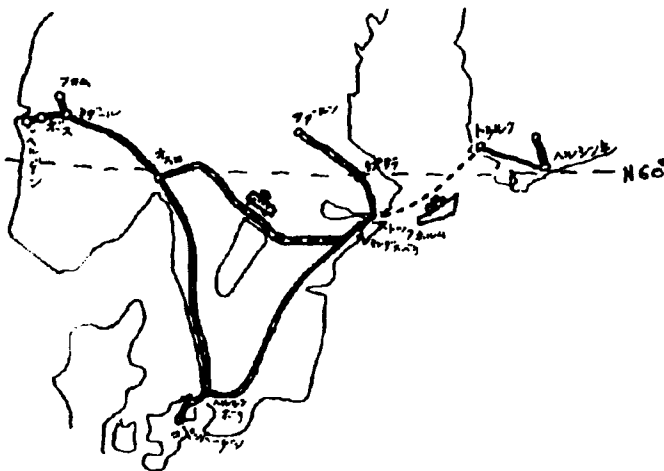


北緯 60 度の旅

(データ工学) 喜多尾 憲助

公務員というものはおかしなもので学会で発表することを奨励されながら、自費で学会に出るときは職務に専念することを免除してもらおう。さらに勉強のために研究施設をまわろうとすれば休暇にしなければならない。以前は自費で国外の学会に出ることなど思いもよらなかった。国内の学会のため、天引き貯金をやっていたこともある。そんな定職もなくなったので、誰に気兼ねすることなく五月末からストックホルムでの学会の帰り、しめて2週間の旅をしてきた。ホテルは泊まった先で次の予約をする。地図をみるとほぼ北緯60度に沿ったところを訪れたことになる。日本の近くでいえばカムチャツカ半島の根元に相当する緯度だが、それほど北国へやってきたという感じはしない。便はフィンランド航空、朝11時45分成田を立ちヘルシンキ乗り換えでストックホルムの北約40km、ウプサラとの中間にあるアーランダ空港に夕方の5時半頃に着く。太陽はまだ十分高い。ここでは夕方などという言葉はないのではなかろうか。中央駅までバス。ボルボだのベンツだの言いあっているうちに、日曜日のせいだか閑散とした駅前に着いた。学会はそこからさらに15km南のHuddingeで開かれる。7時から会場近くの宿でウェルカムパーティがあるので、連れをせきたてて電車に乗り込む。向い合わせの席には厚手のオーバーを着込んだ老婦人が乗って来た。さすがに暑いらしくそれを脱いだ。その下は真冬もののスーツだった。旅行中天気つきで、裸になって日光浴をやっている人をいたるところで見かけたほどだが、このときには高いセーターを買わされる羽目になるのではないかと、一瞬ひやりとした。

Huddinge 駅の次が、学会会場最寄りの駅 Stockholm syd/Flemingsberg だ。sydはsouth、スウェーデン語に berg と borg があるが、前者は山・丘、後者は城を意味するから、さしずめ南ストックホルム・フレミングが丘駅ということか。Huddinge の駅前には建物が並んでいて街らしいが、Flemingsberg 駅の周辺には全く何も無いが、駅を挟んで両側に高層アパー



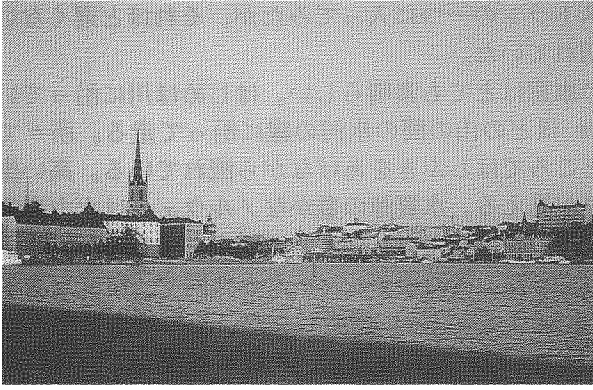
トがいくつかみえるが、あとは林だ。ところどころに大きな岩がむき出しになっている。宿舎のホテルは駅の南口を出た崖の上にある。ホテルから300mほどのところにカロリンスカ研究所が運営する大きな病院 Huddinge SH があり、その付属研究施設が今回の学会 (Conf. on Trace Elements in Health and Disease、主催 International Society for Trace Element Research in Humans および Nordic Trace Element Society) の会場になった。学会のオープニングといえ、たいてい会長の挨拶とか来賓の祝辞が相場だが、ここでは近くの高校生の楽しい合唱で始まった。しかし先生の方が張り切ってしまい、たてつづけに5、6曲もやり、時間ですなどと言われていた。口頭発表の方は3会場に別けて進められた。ポスター発表は期間中張り出して置くことになったが、ポスターセッションは夕方から2時間半、軽食・ワイン付きである。はじめ参加者を口頭発表会場に集め、一人5分ほど喋らされることになっていたはずだが、中止の貼紙がでている。これ幸いと、たっぷり食べワインもしこたま飲んだ。ところがどうも雰囲気があやしい。会場をのぞいたら、ウェルカムパーティで知合った人が喋っている。彼もポスター発表のはずだ。どうやら座長が適当にピックアップして壇上に呼び出しているようだ。これはいかんと、OHP用紙に向かっているうちに、旅の疲れとアルコールでぐっすり寝込んでしまった。名前を呼ばれたそうだが全然気が付かず、座長にも共同研究者にも申し訳けないことをしてしまった。

バンケットはストックホルムのシンボル、市庁舎 City Hallで行われた。パンフレットにストックホルムはスウェーデン最大のコミューン kommun であると書かれていた。この国は立憲君主国だが、それぞれ地域は自治色が強く、市コミューンの行政は、市議会を構成する各政党からその議員数に比例して選ばれる常任委員会が審議し、市議会で選出された10人の理事が運営する。バンケットではまず市コミューンを代表する人の挨拶があり、ついで伊藤雄之助と三国連太郎を足して二で割ったような管理人とおぼしき人物がおもむろにこの建物を説明し、ノーベル賞の授賞記念晩餐会や舞踏会をここでやる、貴殿がたままざら御縁がないわけでもあるまいなどと、金ピカの女神の壁画を指さしながらのたまう。この市庁舎はメーラレン湖につなぐ水路 Riddarfjarden に面している。fjarden はフヨルドのことだろうか。



北欧の駅の手洗いはたいてい有料で、ストックホルムでは5クローネ貨がいる。ここではデパート内の手洗いですら有料だった。風呂やの番台みたいに入口に人がいて、ドアを開けるメダルと引き替えるところもあったが、たいていは入口の鍵箱にコインをいれて開ける仕組みになっている。われわれの間で「ゴクローネ」が、ついに手洗いの代名詞になった。その「ゴクローネ」から戻ってきた連れが「うまい手があるものね」という、聞けばドアの外で待ちかまえていて開くやいなや、ノブを押えサッと入れ替わったのだそうだ。

国の休日である「昇天祭」の日は学会も休みになる。列車でストックホルムの北西 250kmにある Falun までなんと



ストックホルム市庁舎からのながめ

間に合わせて、2冊も持ってきたが、テキもさるもの、こんな家へ帰ってから思い出すために読むものよとのたま、開けようもしない。お前さんも同罪だと宣告する。列車は Uppsala を通る。遠くに大聖堂の2本屋根が見え、街は建物の色のせいか清潔な感じがした。駅前には自転車がいっぱい置かれていた。Sala という駅名が眼に入る。Uppsala とは「上」サラのことらしい。Fauln は県庁所在地なのだが、休日のためか、閑散としている。銅山の町で17世紀には世界の産出量の3分の1を占め、この国の近代化を支えた、と手にしたガイドブックにある。連れが「ゴクローネ」といい出したので、ダーラナ博物館に立ち寄る。ここにはこの地方の民族衣装や古い家屋内部、銅製品、絵画、彫刻が展示されている。小中学校の生徒の作品を集めた部屋もあってほほえましい。さすが「ニルスの冒険」の作者セルマ・ラーゲリヨフの仕事部屋を再建、展示しているところだなと思う。市立劇場を背に川を眺めながら駅前のスーパーで買ったパンとジュースで昼飯にした。カモメのような形をした頭の黒い水鳥が眼の前を横切って飛んでゆく。

ストックホルムを出た列車は、南へすこし下がってからスウェーデン最大の湖ウェーネルン湖にふれてからノルウェーにはいる。国境線というものがいったいどうなっているのか、柵でもあるのか確かめたいと思っているうちに居眠りをしてしまった。気が付いたらもう山間部を走っている。左手に海がみえるとまもなくオスロだ。中央駅の出口の壁にはナチと戦った記念のレリーフがあった。オスロ版「鉄路のたたかい」だろうか。駅の正面の道が一番の目抜き通りだか、どこでもやたらに人が多く、ざわざわついている。市庁舎前の港の広場にはそれこそ人であふれていた。6月はもう夏で、人はこの季節をいっときたりとも逃がすまいとしている。たいていのレストランは店の前にテーブルと椅子が置いてある。ストックホルムでもそうだったが、面白いことに窓に戸がない。テーブルと椅子を出していないところでも戸がない。要するに吹抜けで表と店の中と区別はない。夜になったらどうするのかと心配になった。客であふれ、並んで順番をま

いうことなく足を延ばした。本当はダーラナ地方の中心であるMoraまで行きたかったのだが、便が悪く夜までに宿へ帰ってこれないことがわかったので途中で変えた。今回の旅行はとかく「壮図」半ばで変更することが多く連れからはしばしば非難の眼を向けら

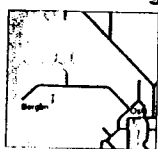
つような店もあるかとおもえば、全然人の入っていないところもある。ヘルシンキではわれわれもそんなレストランの一つに入ってみたが、それほど遅くないのに食べ物などあらかた売り切れていた。

オスロからベルゲンへの車窓はとても素晴らしい。はじめは川に沿っているが、やがて列車は標高 2000m ほどの山の間の氷河の縁に沿って走る。所々で雪解けの水が湖を作り、あるところではしぶきをあげながら流れている。高い崖からは滝になって落ちているのが見える。水資源の豊かなノルウェーは水力発電が盛んである。第二次大戦前、この豊富な電力を利用して重水を生産した。ヒトラーはそれを目当てに侵攻してきた。大戦後デンマークと共同で、研究用原子炉をオスロの東 Lillenstrøm 近郊の Kjeller に建設したが、それはもちろん重水炉であった。Finse 駅か Hallingskeid 駅だったか、正確には憶えていないが列車の窓から見上げるとホテルが建っている。目の前には雪原が広がっている。その先は山だ。宿をベルゲンにとったことが悔やまれる。Myrdal から支線に乗り換える。この線は海拔 866m からかのソグネフヨルドの奥の Aurlandsfjord の端、海拔 2m の Flåm までの 20km を谷沿いに下る。上の方はループ線になっている。一つ目の駅を過ぎると間もなく Kjos 滝にさしかかる。線路はそれをトラバースする形になるので、見物のため列車は一時停車してくれる。全長 93m だそうだが、線路がまたぐのは上の方 4 分の 1 ぐらいのところだろうか。この滝の源になっている湖からの流れも水力発電に使われており、フロム線はその電力で走る。滝もさることながら、谷間の緑がきれいだ。下るにしたがって日光が弱くなるせいか、色濃くみえる。ところどころにある小さな草地には羊がいる。教会もあった。人影はほとんどみかけない。途中からザックを背負った人が乗ってきた。谷筋を歩いてきたようだ。時間があたらせひやってみようと思った。フロムの駅は鍵の手に曲がったフヨルドの一番奥にあり全貌を窺うことができない。フヨルド見物はふつつここから船に乗って下る。わが方は Voss で時間を潰

したため時間切れ、またしても行ったつもりにする。

Voss は湖に面している。冬はスキー客でにぎあうらしい。駅の裏の斜面にはリフトがあった。駅からオスロより町が広がっている。1277年に建てられた教会がある。石積みの壁の、自然のモザイク模様が美しい。ナチス・ドイツの破壊をまぬかれたこの町唯一の建物だという。なぜ、こんな小さな町が戦火に巻き込まれた

41 Oslo-Bergen



Tog nr.	1451	61	601	63	65	605	607
		▲	▲	▲	▲	▲	▲
Oslo S	0730	1030	1430	1542	2300		
Lysaker/Torshov	p0738	p1040	p1438	p1551	p2310	p2346	
Aker	p0752	p1058	1	1820	2344	0209	
Drømsen	0806	1108	p1505	1820	p2325	p0001	
Hokksund		1129		1820	2344	0209	
Vatnsund		1152		1820	2359		
Hønefoss		1217	1556	1715	0021		
Flåm	0900	1305		1715	0022	0123	
Nesbyen		1012	1334	1823	0209	0248	
Ål		1024	1350	1713	1836	0234	0323
Geilo	0910	1048	1412	1731	1856	0301	0346
Ulsetvatn	0936	1108	1436	1752	1916	0327	0408
Haugastøl	0953	1118	1449	1827	1927	0336	0419
Furø	1010	11	1501	1936	0348	0428	
Hallingekeid	1040	1150	1532	2000	0414	0453	
Myrdal (Flåm, tab. 42)	1120	1225	1510	1906	0449	0528	
Uppere	1150	1227	1618	1906	0502	0528	
Mjølstøl	1157				0517		
Voss	1245	1307	1708	1948	2115	0548	0614
Dale		1308	1710	1947	2117	0600	0616
Vekedal						0631	0645
Årne		1404	1808	2041	2216	0706	0725
Bergen		1411	1818	2048	2223	0720	0752

● Grønne anganger: Møn, torsdag, fredag, lørdag, søndag
 ● Vind høyfjeller og brennpåske helligdager vil det bli noen endringer i hvilke anganger som er grønne. Det samme gjelder i skilensens venterier.

のだろうか。昔の家並みは教会から想像するしかないが、今は店やの窓も大きく明るい、静かに落ち着いている。連れはもう一度来ることがあったらこの町に泊まって見たいという。

むかし西洋史でハンザ同盟のことを教わった。ベルゲンもその都市の一つで、駅舎の大時計の上の壁の「Hansa」の文字が誇らしげだ。両側に迫っている丘の上の方まで家が建っている。ケーブルカーに乗ってそんな丘の一つ、フロイエン山に行き、夜景と日没を楽しんだ。夕日は大きく見えるものだが、どういうわけかとても小さく見えた。ソルベグの歌を思いだした。北欧の食べ物である塩漬けの鱈やニシンは塩辛いだけだし、ハムやチーズではなんとなくしまらない。ベルゲンではインド料理を夕食にした。メニューにタンドリ・チキンとあるのでそれを取り寄せる。インデカ米のライスがつくので、カレー汁があるかと聞いたから持ってきてくれた。久しぶりのカレーライスだ。外国へ行って食べ物に飽きたらこれにがぎると思う。

予定は常に狂う。それが楽しいと思えるのは帰ってきてからだ。連れの手前、あせって右往左往することになる。列車に確実に座りたかったら指定席券を買う、しかしこれは必要条件ではない。空いていればどこに座ってもいいらしい。オスロからコペンハーゲンまでの夜行では、用心のため指定席券を買った。ホームに行ってみるとなんと、指定席券に書き込まれている番号の車両がないではないか。窓口とホームを同じ運命のフランス人と行ったり来たりする。コペンハーゲンからストックホルムまで戻り、ヘルシンキまで船に乗るつもりだったが、時刻表をよく見なかったために波止場へ着いたら既に出航した後だった。仕方がないので Turku 行きのシリヤラインに乗る。12 時間の船旅だ。島と島の間を滑るように進む。トゥルクの船着場の近くにある中世の要塞は見ものの一つだが省略し、バスに飛び乗ってトゥルク駅へゆく。ところが時刻表にのっているヘルシンキへの列車は運休だという。なぜか分からないので、次の列車に乗ることにして町を一回りした。戻ってもう一度聞き直すと、工事かなにかでここ1週間というもの運休らしいことが分かった。代替バスしかないという。しかしそのおかげでパイプオルガンで名が知られる聖堂や、シベリウス博物館に寄ることが出来た。ここには楽器のコレクションがある。入口をはいると Finlandia が流れるしくみだ。フィンランドでは看板はじめ、どれもスウェーデン語が併記されている。Helsinki は Helsingfors という。博物館でもらった音楽フェスティバルのプログラムも二カ国プラス英語で書かれていた。フィンランドのことをフィンランド語で Suomi ということはこのたびはじめて知った。今回立ち寄った国の名をそれぞれの国の言葉でいえば Danmark、Norge、Sverige である。

